

『鯉名の銀平 雪の渡り鳥』『小雀峠』解説

佐藤 忠男

映画評論家
日本映画学校校長

日本では無声映画は全て弁士の説明つきで上映されたが、これは日本で文楽という人形劇が盛んに上映されて強い影響を持っていたことと関係があると思われる。無言で操られて演技する人形の舞台の脇にストーリーとセリフを語る太夫がいて人気を得ていたのである。そのナレーションは多分に七・五調という韻をふんでいて、物語詩と言っているものであった。映画の弁士たちは普通は日常的な口語で説明をしたが、作品によっては七・五調を多分に盛り込んで口語ととりまぜて朗々と謳いあげることがふさわしい作品もあり、それらは弁士の美声の聞かせどころとなったものである。

『鯉名の銀平 雪の渡り鳥』は1931年の作品である。原作は長谷川伸。彼は当時やくざを主人公にした芝居のヒット作をつぎつぎに発表していたいへんな人気を得ていたが、その芝居のセリフは歌舞伎の影響を強く受けていて、基本的には口語だが、要所々々で多分に七・五調になり、やくざの喧嘩のときの啖呵などではそれが威勢の良さを盛り上げることになった。それらは股旅ものと呼ばれて長く続く人気を得たが、その人気のかなりの部分はセリフの調子の良さによるもので、弁士にとっても話術の技巧の聞かせどころだったであろう。

これを製作したのは阪妻谷津撮影所である。当時人気絶頂だったスターの阪東妻三郎が自分の主演する時代劇映画を専門に製作するスタジオとして千葉県谷津に設立したものである。

阪東妻三郎（本名・田村傳吉）は1901年、東京の生まれ。小学校を出ると歌舞伎俳優の弟子になり、自分で一座を組織して芝居をしたこともある。1923年にマキノ映画製作所に入って映画俳優になる。『小雀峠』はこの年に出演したたくさんの作品のひとつで、一部分しか残っていないが、この大スターの現存する最も古いフィルムとして貴重である。当時日本映画の最大のスターはやはり歌舞伎出身の尾上松之助であったが、彼は歌舞伎の伝統を映画にも忠実に持ち込んで、ゆっくりと大見得を切るという立ち回りを演じていた。そこに阪東妻三郎は、当時すでにアメリカのスターであるダグラス・フェアバンクスがやっていたような激しいスピードのある立ち回りを持ち込んで一躍大きな人気を得たのである。そして1925年には自分の主宰するプロダクションを設立し、主演作品を続々と送り出した。『鯉名の銀平 雪の渡り鳥』はその時期の作品のひとつである。